

107 年度第 1 学期 One Asia 財団国際講座

「アジア共同体と素読論：江戸の知の作られかた」

第 9 回 One Asia 財団国際講座は、徐興慶外国語学院長の招聘により、中部大学副学長、京都大学名誉教授である辻本雅史教授に講義を行っていただきました。辻本教授は教育史、日本思想史研究で有名な学者であります。例えば、「近代教育思想史の研究」(思文閣出版、1990 年)、「学びの復権」(岩波現代文庫、2012 年復刊)、「教育を『江戸』から考える～学び・身体・メディア」(日本放送出版協会、2009 年)「思想と教育のメディア史—近世日本の知の伝達」(ペリかん社、2011 年)等、日本思想史研究の分野では最高の学術成果です。そこで、この講演は、「アジア共同体と素読論：—江戸の知の作られ方—」と題し、その深い学術成果に基づいて、中国古典である漢文を江戸時代の知識人の学習を「素読」で築いた江戸儒学の知識態様を基に深く掘り下げ解説していきます。以下は授業の概要です。

東アジアは文化の観点から「漢字文化圏」を構築し、日本、韓国、ベトナムなど東アジア諸国は中国古典の漢文のテキストを共有しています。各国は、どのようにテキストを読むか、その方法論は、学術と思想の歴史的発展でもあります。日本では、いわゆる中国古典漢文の本とは、四書五経を指しています。儒学はすなわち四書五経を読む学問です。孔子は今から 2500 年前の人物で、孔子の思想は古典に記録され、現在に至りました。後の世代はこの四書五経書を読むことで孔子と対話することができます。そのため、300 年前の江戸時代においては、この経典を読むことが孔子の思考を学ぶことでもありました。しかし、日本ではどのようにしてこの漢文を読む困難を克服したのか。辻本教授は江戸儒学の学習方法と、この時の「知識」の特質を次のように説明しています。

日本では読めない中国の古典漢文の本は、日本語の文法に転換するという「漢文訓読法」のやり方を用いて読むようにしました。江戸時代の子供たちは 7 歳頃から勉強を始め、2000 年の古代中国の漢文と経書を、日本語の訓読で声に出して読みました。幼児期に古典の漢文を声に出して暗唱する「素読」は、訓読を身につけるための基礎学習です。では、なぜ江戸時代の子供の教育で中国の漢文の古典を学ばなければならないのでしょうか？ その理由は、当時の子英才教育を受けた供達は、経書を暗唱して朗読して読むことから始めました。漢文で書かれていなければ、それは学術論文ではなかったのです。英才の育成の観点から、京大地理学教授であった小川琢治氏の 3 人の兄弟を例に取りますと、小川教授一家は東大と京大の教授を務めたのですが、子供の頃から「素読」を始めました。1949 年に日本で初めてノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹は、小川教授の実弟であり、同じように小さい時から「素読」の学習を始めていました。湯川博士が自ら語ったところによると、「素読」は彼に多大な影響をもたらした可能性があります。要するに、江戸時代の日本では、「素読」はすべての学習のための先決条件になっていて、江戸知識の基礎は「素読」の学習から作られていました。これと相反して、ヨーロッパの近代科学に基づく「現代の知識」は、文字を読み書くことから始めるという、今日の学校教育の学習に基づいています。現代の学校では、

意味を理解しないで経典を暗唱する「素読」の学習方法が否定されました。

その後、辻本教授は江戸時代の漢文習得の道を説明しました。実際に「素読」の学習が始まったのは17世紀初頭で、日本は、「舶載書」と呼ばれる清・明朝と朝鮮からの教科書の輸入に頼っていました。しかしながら、句読点なしで読むことができる教科書はきわめて少数でした。量も少なく高価なので、特権的な知識人だけに限られていました。当時の出版されていた教科書は、主に科挙向け朱子学学習書でした。「四書」の朱子を正しく理解するために、「四書集註」を書き写していました。つまり、17世紀初頭の日本の知識人は、明代の集注釈書（四書学）で朱子学を理解していたのです。言い換えれば、朱子学を学ぶことは、朱子の注釈である四書を学ぶことだったのです。さらに、漢文のテキストを読みやすい本に変えることは、17世紀の学者の仕事でした。第二世代では、教科書は符号を付けて「訓読」の本に変換され、日本で出版されました。日本で出版された本は、「舶載書」に対して「和割本」と呼ばれています。辻本教授は、17世紀は、講座の字間が限られていることから説明を保留しつつ、これは日本にとっての「メディア革命」（文字と出版による）であるというユニークな見解を示しました。

「素読」は、貝原益軒（1630-1714）が提案した学習理論です。辻本教授は、「益軒は江戸時代にとって最良の友人だ」として笑顔で語りました。「年わかき記憶つよき時に、四書五経をつねに熟読し、遍数をいか程も多くなかきかねて、記誦すべし」（『和俗童子訓』巻之三）。益軒は主張する。「四書を、毎日百字づつ百へん熟誦して、そらによみ、そらにかくべし」。彼は「四書が黙読できれば、真実を理解することができ、あらゆる種類の本を読むことは容易に習熟できる」「文章を書く際に大きな助けになる。このように、「四書」を勉強して覚えている限り、初心者の進歩は大半が完成すると言える（同上）。四書を例にとると、字数は52,804字あり、毎日百字と計算して、すなわち528日、約1年半から2年あまりで全部の黙読学習ができることとなります。「素読」の本は、儒学の原典であり、孔子の思想が豊富な経書です。経書を声に出して暗唱すると、手元に本がない場合でも、経書の言葉を口にすることができます。

これは、経書の全部の内容をまるごと体に埋め込むことになるのです。この意味で、辻本教授は「素読」を「テキストの身体化」と呼びました。身体化の言葉は孔子の神聖な言葉であり、自分の思想を表現するためにそのような言葉を使用しています。文章を身体化した日本は、たとえ言葉として理解できないとしても、漢文の経書を身体化することを通して朝鮮や中国の知識人と交流することができます。ちょうどカントが西洋哲学を伝える言語としてラテン語を見ていたように。したがって、江戸の知識人は常に漢文で知的文章を書きました。これはまた、「漢文で考える」ことを意味します。儒学とは、経書の言葉で思考が表現され、漢文の言葉で表現できる知識です。これは、現代人にとって知識が抹殺されるように思っている素読学習を義務づけている理由であり、江戸日本人が幼少の間に避けられない必修科目です。当然、元は江戸儒学の知識を構築する方法であり、現代の学校とは違うものです。

現代の大学は、例外なく、ヨーロッパを起源とする現代の知識に基づいています。これは、かつて東アジアが共有していた儒教の知識とは明らかに異なります。今日の現代の知識は何をすることができるか？また 何が隠されているか？ これは私たちが今日の大学の可能性と限界を再考すべきものです。「メディア革命」が急速に発展している現在、学生は本を読もうとしません。これは目下のメディアの状況と不可分の関係にあります。これは、また同時に大学が前提とする現代の知識の危機でもあります。そのような知識の形を考える時、現代以前に「素読」によって確立された江戸儒教の知識のあり方は、限りない啓発に満ちています。(原稿：黄美恵)